

# エフタは娘を，モアブ王は己が息子を， 犠牲としてささげたのか？<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット  
日原 広 志 (訳)

## エフタとアビメレク

士師記の中には、指導者の興隆と衰亡という基本的に同じ物語を語っている二つの章 - 9章と11章 - があります。それらの近接は、これが両者の類似点と相違点を際立たせる意図的な並置であることを示唆しています。共通点として、これらの男性のいずれも、家族の中核には属さないと見なされる女性から生まれました。すなわち、アビメレクの場合は側女（士師記8:31）〔から〕、一方エフタの場合は遊女（士師記11:1）〔から生まれました〕<sup>2</sup>。両者共、家族の中でアウトサイダーとして成長し、エフタは実際に彼の兄弟達によって追い出され、追放者として生きることを余儀なくされます。両者共に戦士であり、しかし大変異なった道によって指導的地位に到達します。すなわち、アビメレクは兄弟達に対する暴力によって、一方エフタは、戦時下に指揮を執るよう要請されるに及んで。最終的に、両者共に劇的な転落に苦しみます。すなわち、アビメレクはある戦争の過程で一人の女が彼の頭上

---

1 〔訳注〕これは2018年5月21日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた神学部ロングチャペルでの公開講演である。原題は、“Did Jephthah Sacrifice His Daughter and the King of Moab His Own Son?”。この論文のより以前のヴァージョンについては <https://thetorah.com/did-jephthah-actually-kill-his-daughter/>参照。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

に石臼を落としたことで致命傷を負いました<sup>3</sup>。一方エフタは自らの娘を犠牲としてささげることになります。

並行点が十分に明らかなので、読者は二人の人物を比較するよう強いられます。しかし、いずれの場合も、語り口のスキルが秀でているので、彼らは野望も欠点も持った実在の人間のように生き生きとしており、読者は彼らを駆り立てたものや、引き出すべき教訓について探求するよう促される程です。にもかかわらず、物語というものがいつもそうであるように、読者が没頭する一方で、特殊な細部についての議論のための余地を残すに十分な曖昧さが、テキストそれ自体の中に残るのです。エフタの場合においては、最も物議を醸しているのは、結果的に彼が自らの娘を祭儀的犠牲として実際に殺すことになる、戦闘に先立って彼が行ったあの誓いです。確かに、それは古今の聖書注解者達の一致した見解であるようにみえます。その上さらに、それは、子供犠牲がヘブライ語聖書において - たとえ非難されるにせよ<sup>4</sup> - 実践されていた<sup>5</sup> という聖書記録中の証拠と一致しています。しかしエフタ物語の実際のテキストをより詳細に見ることは、彼を駆り立ててきたであろう要因のいくつかを、また彼の娘の実際の運命についての〔通説とは別の〕選択肢となり得る理解を指し示してくれることでしょう。これ〔エフタ物語〕は〔物語〕中に子供が実際に「犠牲としてささげられ」るただ二箇所の聖書物語の一つであるため、もう一つの物語も - それはモアブ王の息子に関するものですが（列王記下3:27） - 後で熟考されることになります。

エフタの物語は、実際には、士師記の前章末において始まっています。士師記10章17節において、私たちは、アンモン人がギレアドに対して陣を敷い

---

3 アビメレクについては Jonathan Magonet, 'Avimelech: The Rise and Fall of a Biblical Dictator' 日原広志訳「アビメレク - 聖書に登場する一人の独裁者の興隆と衰亡 -」『西南学院大学神学論集』第73巻第1号（2016年3月）、101-116頁参照。

4 明示的にはレビ記20章2-5節において、そして暗黙裡には、神がアブラハムに息子イサクをささげよと命じる、あの物議を醸す物語の結びにおいて（創世記22章）非難されている。

5 列王記下16章3節=歴代誌下28章1-4節、列王記下17章17, 31節、21章6節、詩編106編38節、エレミヤ書19章4-5節。

ていることを学びます。それに応じて、ギレアドの指導者たちは、「アンモンの人々に戦いを仕掛けるのは誰だろうか。その人が、ギレアド全住民の頭（ローシュ）となろう。」<sup>6</sup> (10:18) と話し合いました。

エフタはその直後に11章冒頭で紹介されますが、そこで彼は聖書の術語の中でも高い賛辞である“ギッボール ハイユ”「強い戦士」として叙述されています<sup>7</sup>。エフタの不幸は遊女の息子であることです。彼の父ギレアドには妻から生まれた沢山の息子達がおり、彼らは成長すると、エフタが父から何も相続することがないように、彼を追い払いました。エフタは逃亡を余儀なくされ、「トブの地」に身を落ち着けます。そこで彼の周りには同様に居場所を追われた男達、聖書の術語では“レーキーム” - 文字通りには「中身の無い」、おそらく彼らが土地を持たないか、そうでなくとも社会に何の位置も占めていないことを意味しつつ - が集まって来ました。ここで私達は士師記9章からアビメレクとの比較をすることができます。自分と同様に困窮していた境遇の人々を喜んで迎え入れたように思われるエフタとは異なり、アビメレクはそうした人々を、彼の政治的計画の一部として、その地方の神殿からそのために提供された資金を使って、実際に雇うのです。しかし、彼が雇ったその男達には、ある付加的な記述が伴っています。というのも彼らは「手に負えない」類いのものを意味する“ポーハズィーム”であり、彼自身の私兵を構成しているからです<sup>8</sup>。アビメレクが彼らと一緒にいる目的は、ほどなく、彼

---

6 訳注：以下日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 新共同訳』からのものである。またイタリックによるヘブライ語の指示は講演者による。

7 その同じ術語はギデオン（士師記6:12）、ボアズ（ルツ記2:1）、そしてサウルの父（サムエル記上9:1）について用いられ、軍事的能力と富を兼ね備えたものであることを示唆している。

8 訳注：エフタの物語（士師記11:3）では男達は“アナーシーム レーキーム”（レーキームの男達）と中立的な術語レーキームで叙述され、単にその社会における彼等の地位を描写しているだけであるのに対し、アビメレクの物語（同9:4）では“アナーシーム レーキーム ウー・フォーハズィーム”（レーキームで且つポーハズィームの男達）と暴力を喜んで請け負うことを仄めかす語ポーハズィームが付加されている。前掲「アビメレク - 聖書に登場する一人の独裁者の興隆と衰亡 -」、104-105頁参照。なお新共同訳では「ならず者」（11:3）、「命知らずのならず者」（9:4）とどちらもネガティブな類義語として訳されている。

が王になるための入札の一部として、70人の兄弟の殺害に着手するに及んで明らかになるのです。

対照的に、エフタは長老達の派遣団が彼を招聘しに来るまで、トブの地で生活することに満足していたように思われます。アンモン人の攻撃は大変激しくなってきたので、より先を見越した何かが行われる必要があります。おそらくエフタの軍事的大立者としての評判は彼らの注目するところとなっており、そこで彼らはある申し出を携えて彼の許へやって来ます。彼らの会話は以下のテキスト（士師記11：6-10）において十分に記録され、それは排除とこれまでの扱われ方に対するエフタの怒りを明らかにするだけでなく、彼らの訪問を契機としたある種の野心の喚起をも仄めかしています。聖書におけるそうした記録された会話の常として、言葉の背後で何が実際に行われているのかを読もうとすることが必要です。

長老達「帰って来てください。わたしたちの指揮官（カーツィーン）になっただけならば、わたしたちもアンモンの人々と戦えます。」

エフタ「あなたたちはわたしをのけ者にし、父の家から追い出したではありませんか。困ったことになったからと言って、今ごろなぜわたしのところに来るのですか。」

長老達「だからこそ今、あなたのところに戻って来たのです。わたしたちと共に来て、アンモン人と戦ってくださるなら、あなたにわたしたちギレアド全住民の、頭（ローシュ）になっていただきます。」

エフタ「あなたたちがわたしを連れ帰り、わたしがアンモン人と戦い、主が彼らをわたしに渡してくださるなら、このわたしがあなたたちの頭（ローシュ）になるというのですね。」

長老達「主がわたしたちの一言一答の証人です。わたしたちは必ずあなたのお言葉どおりにいたします」

私たちはもう既に前章の終わりにおける議論から、民の指導者達は、彼らを戦闘に導く人物にギレアドの住人達の頭たるローシュの地位を提供する用意があったということを知っています。彼らのエフタへの最初の申し出において、その申し出は軍事的指揮官としてのある種限定された役割であるカーツィーンの地位へと格下げされています。エフタの返答は、自らのこれまでの扱われ方を思い出させつつ、単に彼の方には彼らのために何かをする筋合いは全くないという素っ気ない拒絶であったかも知れません。しかし長老達は、エフタは彼らが提供する用意があるものが何かを実際に知っており、つまり彼の返答は単に交渉における彼の開始位置に過ぎないと理解します。あるいは彼らは、彼の怒りの背後に、彼を帰還合意へと説得し得るものこそ、彼の家族が彼にしてきた仕打ちの故に彼が喪ってしまった、彼らの社会におけるある種の地位の回復に他ならないことを抜け目なく読んでいます。そこで、彼らの返事は当然その申し出のレベルを上げ、彼をギレアド全住民の頭、ローシュになるよう要請することになるわけです。

今度はエフタも同意する用意ができています。おそらくその称号は彼の出自にもかかわらず、社会の指導的人物として彼の完全な復権を表すものだったでしょう。これは、彼個人にとって、この取引において何が賭けられていたのかを説明するでしょう。しかしまた、彼は自らの運命へのこの突然の転変に関して神の承認を欲する信仰心のあつい人物であるということも明らかになります。その役割を受け入れるための彼の条件は、神が彼にアンモン人に対する勝利を保証するかどうかにあります。この辺りに、あのような悲劇的結果をもたらすことになる彼の神への誓いの根源が存しています。

エフタはギレアドの長老達と同行し、そして民は彼を自分達の頭ローシュとしても指揮官カーツィーンとしても立てました（士師記11：11）。長老達もエフタも自らの欲するものを手に入れたのです。

## エフタの誓い

その後に軋轢の原因となった紛争地域を巡るアンモン人の王との長い交渉が続きます。しかしその王はエフタの主張を受け入れようとはせず、戦争が

始まりました。主の霊がエフタに臨み、彼はアンモン人の地域へ成功裡に進撃します。まさにこの時点で、彼は自らの誓いを立てるのです。

「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモン人から無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る“もの”（あるいは“者”）が主のものとなるでしょう。そしてわたしはそれを、焼き尽くす献げ物としてささげるでしょう。」（士師記 11：30-31）<sup>9</sup>

困惑させる特異性の故に、その誓いは聖書の記録中でも類を見ないものです。感謝のささげ物として動物を犠牲にすると誓うことは、それを成就するために利用できる適切な祭儀機構を伴った聖書の慣習でした。しかしこの事例では、ラビ達が指摘しているように、誰または何が彼を迎えに出て来ることになるか何とも言えないのです。もし動物が〔出て来たとして〕、それが清くない、犠牲として受け入れられないものであるかも知れません。その上さらに、誓いの実際の文言中に何かしらの曖昧さが存在します。その冒頭のフレーズ“ハツ-ヨーツェー アシエル イェーツェー”は、文字通りには「出て来る場所の、その出て来ている〔もの〕と読め、これが人物「出て来る者」あるいは動物「出て来るもの」のどちらについて言及しているか〔の問い〕を完全に開かれたままにしているのです。しかしその後で当該の主語の運命は、一つの接続詞によって結合または分離された、二つの異なる動詞によって表現されています。その第一の動詞が語るのは、このものは「主のものになるだろう」であり、第二のフレーズは「私はそれ/彼を焼き尽くす献げ物としてささげるでしょう」と語ります。これらは、一般に「そして」を意味する接続詞“ワウ”によって結合されており、二つの行為からなる単一の声明を

---

9 訳注：講演者によるヘブライ語からの英訳に基づく。新共同訳では「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします」（下線訳者）と人間犠牲の文脈になっている。

作っています。つまりこの直後に言及されるように、「主に属すること」とは焼き尽くす献げ物になることを意味します。しかしその同じ接続詞“ワウ”は「しかし」あるいは「また」として読むことも出来ます。つまり、出て来たものは何であれ、誰であれ、神に献げられるだろうが、それが適切であると証明された場合のみ、犠牲とされるだろう〔という意味になります〕。この曖昧さが－実は意義深いものであると判明するかも知れませんが－そのテキストに明らかに存在しています。

しかしこの手の誓いをする事によって、彼は何を考えていたのでしょうか。彼は自分を迎えに出て来るであろうお気に入りのペットでも念頭にあったのでしょうか。特に当惑すべきは、何故エフタは、自分の娘こそが、鼓と踊りで以て、軍事的勝利から帰還した自分を迎えに出て来る者になり得るということに気づかなかったのかです。何と言っても、そうした歓喜の音楽で勝利を祝う先例として、私たちには、葦の海を無事に渡り終えた後、鼓と踊りを以て女性達を導いたミリアムがいました（出エジプト記15：20）。やや時代を下れば、ペリシテ人に対するサウルの勝利を祝うために、これもまた鼓と踊りを以て、サウルを激怒させた例の歌詞「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」を歌いつつ、イスラエルのあらゆる町から出て来た女達もいました（サムエル記上18：6-7）。自分の娘以外に一体誰が、凱旋したエフタを迎えたいと思う可能性があったのでしょうか。

その直後、私たちに語られるのは、彼には他に息子も娘もいなかったのです。彼女だけが彼の血筋を継ぐ者であったという事です。明らかにこれは語り手が読者に銘記して欲しいと思っている重要な情報です。私たちは以下の展開において、このことがどのような役割を演じているかを確認しなければなりません。

彼はその娘を見ると、衣を引き裂いて言った。「ああ、わたしの娘よ。お前がわたしを打ちのめし、お前がわたしを苦しめる者になるとは。わたしは主の御前で口を開いてしまった。取り返しがつかない。」（士師記 11：35）

エフタの恐怖に満ちた反応は、その戦闘が成功裡に終わることにどれ程のものを彼が賭けていたかを確証するものです。諸翻訳は彼の恐怖の叫びのその耳障りな喉音の響き、そしてかの動詞“カーラ”「恭しく頭を下げる」と“ベ・オーフラーイ”「私を苦しめる者達の中の」の語呂合わせ“ハフレーアア ヒフラァティニー ヴェ・アット ハイート ベ・オーフラーイ”を十分に表現できてはいません。今や文字通り彼自身が他ならぬ頭を低く垂れさせられているのですから、おそらく「打ちのめされている」という語は彼の“ローシュ”になりたいという願望への間接的な言及でしょう<sup>10</sup>。しかし彼は自分の娘を、彼を「苦しめる者達」の一人として表現しつつ咎めます。それは強い非難の言葉であり、例えば、アハブ王と預言者エリヤ（列王記上18：17-18）の間の怒りの応酬において使われました。しかし彼の勝利は自分が“ローシュ”になれることを実際に保証している筈なので、彼が彼女に対して抱いてきた筈の父親としての愛情を超えてまで、娘の登場は他の何を「妨げて」しまったのでしょうか<sup>11</sup>。

彼女の返答は、子としての愛情と宗教的投企の極端な混合です。

彼女は言った。「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」（士師記11：36）

---

10 訳注：“ハフレーアア ヒフラァティニー”（新共同訳「お前がわたしを打ちのめし」）は動詞カーラ「お辞儀する／屈服する」のヒフィル（使役）形不定詞独立形強調とヒフィル形完了2人称女性単数に動詞語尾1人称単数の付いた形で字義通りには「確かにあなた（女性形）が私をお辞儀させた」となり、ローシュになって人々にお辞儀される筈だったエフタには皮肉な結果となっている。

11 訳注：“ベ・オーフラーイ”（新共同訳「わたしを苦しめる者」）は前置詞と動詞アーハル「妨げる／煩わす／苦しめる」のカル形能動分詞男性複数連語形に人称接尾辞1人称単数の付いた形で字義通りには「私を妨げている者達の中の（一人）」となる。またアハブ王とエリヤの応酬では「（イスラエルを）煩わす者」（新共同訳列王記上18：17）と訳されている。



台詞の導入句が「なぜか」二度繰り返されるというヘブライ語本文ではよくある一例として、ここでは「そして彼女は言った」が〔36, 37節で〕続きます。そのことは、彼女が新たなコメントをする前にある程度時間が経過しているか、何らかの背後でのやりとりが行われたことを示唆するものです。この新しい導入がどのような特殊な場合にいかなる重要性を持つのかは明白ではないかも知れません。実際、後続の文中で彼女が語る内容は、全く単純に彼女のすぐ前の言明に直接つなげてもよいものです。それにもかかわらず、あたかも私たち－物語の登場人物達と読者達－がたったいま目撃したものの衝撃的な意味内容を吸収するために時間を必要としているかのように、「そして彼女は言った」の反復は物語の流れを中断させています。

彼女は更に言った。「わたしにこうさせていただきたいのです。二か月の間、わたしを自由にしてください。わたしは友達と共に出かけて山々をさまよい、わたしが処女のままであることを泣き悲しみたいのです。」  
(士師記11：37)

この世から離れる前に女友達と共に過ごすための、犠牲執行の2か月遅延の懇願は、読んでいても心痛むものです。興味深いのは、その中で自らが成長してきた家族や社会も含め、彼女がそれについて嘆き悲しみたいと思う全てのものの中で、何故その強調は彼女の処女性に関して〔だけ〕なのかという点です。私たちはこのことに、少し後でその主題がもう一度取り上げられる際に、戻って来なければならないでしょう。

エフタは同意し、それから彼女と女友達はその期間行動を共にしました。同じ詳細が〔37, 38節で〕繰り返されます。彼女が父のもとに帰って来ると、テキストは「エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた」と簡潔に報告します(士師記11：39)。奇妙なことに、この言明に続いてただちに、私たちは「彼女は男を知ることがなかった」と伝えられるのです。もし彼女が死んでいるのなら、この情報は殆ど適切ではありません。それ故おそらく、それはその物語の何かもっと広い問題に属しているのです。

続いて、これが「イスラエルのしきたり」になったと述べられます。おそらくこのしきたりの特質については、後続する文中「イスラエルの娘達は毎年、一年に四日間、“レ・タンノート レ・ヴァト-イフターハ”「エフタの娘を記念するために」出かけるのである-に見出されるべきです。ここでも曖昧さが存在しています。“レ・タンノート”という語はヘブライ語聖書の中で他にはただ一度、それもまた士師記の中（5：11）に現れるだけです<sup>12</sup>。そこでの文脈は、「勝利」<sup>13</sup>がその動詞の直接目的語であるため、神の勝利を讃えるべく「言い表す」の意味を示唆します。しかしここ士師記11章においては、その動詞に対する何らの直接目的語も存在しないので、全ての翻訳は推論に留まります。殆どの訳は彼女の運命に対する何らかの祭儀的嘆きを想定しています。その上さらに、「エフタの娘」への前置詞“ラーメド” [to/for] の使用は、彼女について語ることをも、彼女に話しかける-もし彼女がまだ生きているのであれば-ことをも意味し得るのです。

### エフタの娘の運命

上述した通り、私たちは、彼女が処女のままであったという繰り返される情報の適切性を巡る問いと共に残されています。一つの手掛かりは、もう少し遡って、テキストが最初に彼女を紹介した時の言及、「彼女の他には彼には息子も娘も一人もなかった」（士師記11：34）の中にあるように思われます。彼女はエフタの唯一の子だったのです。彼女を喪うことは、エフタが抱いていたかも知れない長期存続する家系または王朝を持つ意図一切の終焉を意味

---

12 訳注：動詞ターナー「詳述する」はヘブライ語聖書中ピエル（強意）形未完了（BDB しかしジャッシヴと同形）3人称男性複数「イェタンヌー」の形で1回（士師記5：11「（主の救いを）語り告げよ」）、ピエル形不定詞連語形“レ・タンノート”の形で1回（同11：40「死を悼んで」）、計2回だけ登場する。

13 訳注：新共同訳士師記5章11節「主の救い」と訳されているヘブライ語“ツイドコート アドナーイ”は「主の諸々のツェダーカー」であり、ツェダーカーは「義、正義、恵みのわざ、救い、勝利」など多様な射程を持つ語である。講演者は「諸々の勝利」と解する。

したことでしょう<sup>14</sup>。彼女の実際の運命の問いに戻る前に，私はエフタの怒りの背後にあったものについて，また彼を出迎えた彼女への最初の反応として，己が娘に対して彼が表明したあの非難について思い巡らしたいと思います。ここで私は，精巧な探偵小説を扱うごとく私たちがテキストを扱えるようにと，語り手が私たちに与えてくれている熟考すべき細部に依存しています。エフタは家族制度の枠組みの外側にいた一人の女性から生まれた結果として，拒絶と究極的な追放に苦しんできました。しかしながら，ギレアドの全住民の頭になるようにとの招聘は彼にとって完全な復権を意味しました。しかしそうした復権の一部は，彼の次代へこの新しい地位を引き継ぐ可能性をも意味します。今や彼の誓いの結果は，どのようにそれが実行されるにせよ，彼からこの未来を奪うことになったのです。実際に，エフタを心理学的に研究してみるなら，これ〔未来の断念〕こそが，無意識的であれ，その誓いの〔真の〕目的だったと示唆することもできるでしょう。もし彼が，鼓と踊を以て自分を迎えに出て来るような人物は自らの一人娘であろうと薄々分かっていたとすればなおさらです。出生の故に無価値であるとみなされ，ことによると心の奥底ではそれを受け入れていた男は，あの誓いを通して，必ずや自分の生涯を超えては何も継続していかないように，あるいは別の言い方をすれば，自分の非嫡出出生という傷は自らの死を以て終わるようにしたのです。

もし娘が実際に焼き尽くす献げ物としてささげられたのであれば，誓いの問題は解決されたことになります。しかし彼女の処女性を嘆くために友達と一緒に山々を旅したことや，そしてそれが生み出したところのある種のしきりについて〔報告する〕付加的資料の全てが，却って別の可能性を示唆しています。これは私たちがエフタの誓いにおけるあの二つの要素まで引き戻しますが，その第一のものは，彼を迎えに出て来る者は主に属するだろうと

---

14 このことが言及に値するのは，王国への関心の可能性は既に〔11章以前においても〕士師記の特徴だからである。士師ギデオンはイスラエルの最初の王になる可能性を提示された。彼は拒絶したが，その息子アビメレクは王になろうと試みた。ただし暴力的諸手段によってだが。

いう内容でした。私たちはヘブライ語聖書において、限定された一定期間自分自身を神への献身者とするという、男性達によってなされるナジル人の誓いというものについて知っています<sup>15</sup>。両親によって、一生涯、神への献身者とされたサムソンとサムエルのようなバリエーションもあります。もしその同じ可能性が女性達に対しても有効であったなら、それは他の女性達の道とは異なる運命、すなわち隠遁生活を受け容れること、つまり実際には子供を持つという必然性－聖書世界の女性達を感化し最重要な優先順位とみなされてきたもの－を犠牲とすることを意味し得ます。もし事態がそうであるなら、その時かの稀な単語“レ・タンノート”は、彼女の死後〔慣習化した〕女性達が儀礼的に彼女を偲ぶ何らかの年中行事についての言及である必要はなくなります。むしろ、年に一度彼女はその隠遁地で、自分に「呼びかける」女友達の訪問を受けることになるのです。この見解を支持するべく、この儀式の持続期間は“ミツ・ヤーミーム ヤーミーマー”（11：40）－逐語的には、「日から日へ」－と表現されています。ある「しきたり」と結びつく時、それは「永久に」（出エジプト記13：10）を意味します。しかしそれはまたサムエル記の冒頭に記されている、エルカナとハンナの家族によるシロの神殿への年に一度の訪問にも使われます。これは特定の家族の一生の間（サムエル記上1：3, 2：19）、あるいはここのように、エフタの娘の一生の間、何度も定期的に発生する出来事を含意するものだったでしょう。エフタの娘への訪問のために許可された実際の時は4日でした。その際「しきたり」についての言及は、その誓いの重大性を前提として考えれば、これら年ごとの短い訪問を許可するために、ある特別な譲歩がなされたということの意味しているでしょう。これらの可能性と共に、もしそれ〔しきたり〕がエフタの娘自身の存命中に限り生じたことであり、他のいかなる女性達も彼女の歩んだ道をたどらなかったのであれば、なぜヘブライ語聖書中にはこれ以上その儀式について何らの軌跡も存在しないのかについてもまた説明できるでしょう。

---

15 ナジル人は神への献身行為として、限定された一定期間の分離と自らに課した諸制限についての誓いを立てる。（民数記6、アモス2：11-12）

上述の説明，またエフタは彼女のために町の外に一軒の家と生涯の生活手段を提供したという〔説明〕については，アブラハム・イブン・エズラ（1089-1167）の功績であり，後にはラビ・ダヴィド・キムヒ（1160-1235）が―彼の父による同解釈を引用しつつ―続けました。

彼女は実際に殺された訳ではないという考えをある程度支持するものは，民からも神からも，エフタの「犠牲」に対するいかなる抗議も欠如している事の中に見出し得るでしょう。おまけにエフタは彼の死までさらに6年士師として職分を務め続けたのです（士師記12：7）。それにも関わらず，現代の学術的見解は，士師記は王国の設立の必要を見据えて，暴力と恐怖の物語に満ちており，彼女の衝撃的な死についてのこの物語も丁度そのようなもう一つのエピソードであると強調しています。

私たちは士師記11章におけるその物語それ自体からどのような結論を引き出すことが出来るのでしょうか。明らかに誓いそれ自体とエフタがそれを果たしたという事実だけに焦点を絞る要約は，彼が彼女を殺したことを指し示すでしょう。しかし私たちがここまで検証してきたエフタの問題ある出自や，それ故社会における自らの現状回復の重要性といった細部は，彼の娘は彼の家を継ぐべき子を持つことがないという悲劇と相まって，もう一つの物語を語っています。その上さらに，彼女は「男を知ることはなかった」という娘の処女性について繰り返される強調はこの面をはるかに一層舞台の中央へ動かすでしょう。つまり私は，可能性の天秤は彼女の生存，つまり神への献身としての隠遁生活の方に傾いていると主張したいのです。もし彼女が死んだのであれば，そうした詳細は殆ど，あるいは全く適切ではありません。〔もし彼女が〕生きていた〔のであれば〕，エフタの誓いの冒頭の数語「主に属するもの」に表わされている通り，彼女は女性の霊性における類い稀な実験であったかも知れない何かの象徴になったことでしょう。たとえさらなる軌跡や例証が聖書の記録から消失してしまっているとしても。

## モアブ王の息子

エフタの娘は焼き尽くす献げ物としてささげられたと想定されているので、士師記のこの〔11〕章は、子供犠牲についてのものと想定されているもう一つの聖書物語－今度は列王記〔下3章〕からですが－としばしば結びつけられます。この事例においては、物語の心理学的な基盤の代わりに、その背景は本質的に政治的で、ここでも叙述されている出来事の諸事情を研究することは有益です。モアブ人は北イスラエル王国の支配者アハブ王に隷属し、重い年貢を支払っていました。しかしアハブが死に、息子ヨラムが王位を継ぐと、モアブの王メシャは反逆の機会を得、貢納を拒否しました<sup>16</sup>。ヨラムはモアブに対する軍事行動を取ることを決定し、南王国ユダの王ヨシャファトに参加するよう要請しました。ユダもまたエドムを属国にしており、エドム王も自領内を通過することになっているその連合に加わります。しかし七日の行軍で彼らは水が底を尽き、その遠征はもはやこれ以上続けられないように見えました。そうした状況下において、預言者を通して神の言葉を尋ねることは一般的でした。ユダの南王国は主への忠誠を留めている一方、イスラエルの北王国は他の神々を受け容れていました。ヨラム王の父アハブを巻き込んだ前回の機会と同様に<sup>17</sup>、ヨシャファトは主に忠実な預言者に尋ねることを求めます〔が、それは〕容易に軋轢へと転じ得る二王国間の緊張を思い起こさせます。結果として、その3人の王は預言者エリシャを訪ねます。偶像崇拝者である北王国の王に対してエリシャは全く敬意を払いませんが、ヨシャファトのために楽を奏する者呼び出し、音楽の影響下で主からの言葉を受けます。その託宣は次々に溝を掘ることでした。すると全く雨は降らなかったにも関わらず、翌朝その溝はエドムから来る水で満ちたのです。エリシャはまた、彼らがモアブを徹底的に破壊することに成功するとも預言しました。日が昇った時、遠くからモアブの人々はまるで血のように赤く映えた

---

16 その一般的歴史的背景知識、特にモアブの王メシャのイスラエル王オムリの王朝に対する反逆については「メシャ碑文」（「モアブ碑」）に記されている。

17 列王記上22章7-18節。

溝の水を見たので、3人の王の兵士間に何らかの争いと討ち合いがあったと思ひ込みました。彼らはその陣営に攻撃しましたが、撃退されるだけの結果に終わり、こうして連合軍は成功裡にモアブに侵入しました。

とうとうモアブの王は孤立し、彼の城塞都市は包囲下にあります。まさにこの時点で、かの犠牲へと至る出来事が簡潔に記録されています。

モアブの王は戦いが自分の力の及ばないものになってきたのを見て、剣を携えた兵七百人を引き連れ、エドムの王に向かって突進しようとしたが、果たせなかった。そこで彼は、彼に代わって王となるはずの彼の長男を連れて来て、城壁の上で彼を焼き尽くすいけにえとしてささげた。するとイスラエルに対して激しい怒りが起こり、彼ら（エドム）は彼（イスラエル）から離れ去り、自分の国に帰った。(列王記下3:26-27)<sup>18</sup>

ここで何が起きているかについては、どのように私たちがヘブライ語の特別な代名詞の用法を理解するかにかかっており、2通りの読み方が存在します。一般的に支持された見解は、自暴自棄の中でモアブ王は、自らの長男を城壁の上で自らの神ケモシユへの公的な犠牲としてささげたというものです。結果的に、彼の神〔ケモシユ〕の怒りが〔三国〕同盟軍をして去らしめたのであるとも、あるいは、侵略者達は自ら目撃したこの蛮行によってひどい恐怖に襲われたので逃げ出したのであるとも、あるいはイスラエルの神が何らかの理由で余りにも激怒したので彼らの出発を引き起したのであるとさえ〔解釈されます〕。これらいずれの読み方にも問題があります。〔第一の解釈について言えば、〕なぜ異教の王が自らの異教の神に犠牲をささげる行為が、何であれイスラエルに対していかなる影響を及ぼし得るのでしょうか。もし

---

18 訳注：27節の人称代名詞の明示とその指示内容の丸括弧による明記、また太字イタリックはいずれも講演者による。新共同訳の27節は「そこで彼は、自分に代わって王となるはずの長男を連れて来て、城壁の上で焼き尽くすいけにえとしてささげた。イスラエルに対して激しい怒りが起こり、イスラエルはそこを引き揚げて自分の国に帰った。」(下線訳者)となっている。

モアブ王の神が怒りを爆発させたと主張されるなら、一体ヘブライ語聖書の他のどの箇所でそのような力がイスラエルの神以外に帰されているのでしょうか。(これは、そのような諸力が〔まだ〕異教の神々に帰されていたイスラエル史の早い時代の名残であるという主張は、なぜそのような明白な例外がその編集過程で見過ごされてきたのかを説明していませんし、あるいはもし事態はそうではなかった〔編集者達は残滓の例外的性格を認識していた〕としたら、なぜその「怒り」の源泉がもっと明示されなかったのか〔を説明していません〕)。そして事例がそう〔怒りはモアブの神が発したもの〕であったとしても、何故この怒りはイスラエルにのみ向けられ、連合の他の者達〔ユダやエドム〕には向かわなかったのでしょうか。〔第二の解釈について言えば、〕なぜ連合軍は必要としていた勝利を実質的に彼らにもたらした〔敵国王自らによる王位継承者焼殺という〕行為によってそれほどまでに恐怖し、逃げ去る筋合いがあるのでしょうか。〔第三の解釈について言えば、〕もし彼らに対して燃え上がったケツェフ「怒り」がイスラエルの神から出たものと想定されるなら、何故〔水の奇跡については〕連合軍を助けるための神の超自然的な介入が既に言及されている章でありながら、〔怒りの出所については〕直接的に神に帰することを全くしないのでしょうか。

ここで何が起こったかについては、どのように私たちが27節における代名詞「**彼の**」を理解するかにかかっていると看做されるところの、より簡単な説明が存在します。26節においてモアブの王は、おそらくその連合の三人の王のうち最も接近しやすく、あるいは弱そうに見えたエドムの王を捕えようとして奇襲部隊を連れて行きます。彼に達し得なかったので、代わりにモアブの王は「**彼の**」息子、つまり、エドムの王の息子（彼に代わって支配するであろう彼の長男）を何とかして捕えます。エドムの王は26節において言及されている最後の人物ですので、代名詞「**彼の**」のその明白な主体はまさに同じエドムの王なのです。それ故、エドム王の「長男」こそが、モアブ王が殺し、城壁の上で公衆の面前で焼いた相手に他ならないのです。連合軍の指導者の一人を捕えようとするこの戦略もまた、その3人の王の同盟は十分に問題を抱えたものであるため彼らはもう既に互いに敵意を示し戦ってしまったのだらうと、



直前でモアブの人々が判断していた記述と符合します。エドムの王の息子に対する公開の焼殺という観点から考慮すれば、この戦争を主唱していた王国であるイスラエルに対して突如湧き起こったというあの激しい怒りは、モアブの神に由来するものでも、ましてやイスラエルの神に〔由来するものでもなく〕、自分たちの王家にとってとてつもない損失に直面したエドムの人々のきわめて人間的な怒りだったのです。必然的帰結としてその連合は分裂し、「彼ら」(エドムの人々)は「彼」(イスラエル)から離れ、そして各々自分の地に帰って行ったのです。

ある現代の注解者達はそのテキストに対するこの読み方を受け容れていますが<sup>19</sup>、その最も早いヴァージョンはおそらくもう一度13世紀のラビ・ダヴィド・キムヒの - 再び彼の父の注解を引用しつつですが - 功績に帰されねばならないでしょう。それは、そのテキストが何を叙述しているのかについて、直接の文脈においても、聖書的態度の観点においても、言語学的、軍事的、そして神学的にはるかにより合理的説明であるように思われます。

## 結論的諸考察

エフタの娘の死とモアブあるいはエドムの王の息子の〔死〕はどちらも聖書における人間犠牲の例であるという見解は、それらテキスト自身によって提起された諸々の問いと疑義にもかかわらず、根強く存続しています。私がかここで指し示そうとしてきたように、そこには明らかに曖昧さが存在していますが、しかし両事例を精読した上でよりありそうな結果は〔通説とは〕全く別の方向に導くものです。諸翻訳にのみ頼る時とは対照的に、私たちはヘブライ語聖書それ自体に焦点を絞れば絞る程、その物語はますます多くのニュアンスを持ち、より豊かなものになっていくのです。

どちらの物語も、読んでいて心地よいものではありません。意図的であろうとなかろうと、エフタが自分の娘を神との交渉における一種の切り札とし

---

19 ごく最近の研究としては Steven Anderson 'Edom's Heir, Edom's Wrath' - <https://truthonlybible.com/2017/05/16/edoms-heir-edomswrath/>がある。

て使ったことは明らかに厳しく批判されています。おそらくその物語から引き出されるべき重要な教訓の一つは、宣誓によってであれ、他のいかなる手段によってであれ、神を操ろうとすべきでないという警告です。たとえエフタの娘が生き延びたとしても、それは彼らの関係性に何らかのダメージを与えたに違いないのですから。聖書物語において、人格的次元がいつでも残り、読み手に影響を及ぼし、異議申し立てをして来るのです。

かの息子の死の物語は、それがモアブ王の〔息子〕であれエドム王の〔息子〕であれ、戦争が社会を飲み込む時に起こるよくある悲劇の一例です。それにも関わらず、わずか二つの短文で描写されたその出来事の恐ろしさは、私たちが否応なく促して、戦争の犠牲者一人びとりの運命に焦点を絞るようにと、つまり軍隊同士が相まみえる時に、その無名の死者の〔運命を見ることから、〕抽象的な戦没者数の背後に〔私たち自身を〕隠し〔、眼前で起こっていることに対して目を閉ざし〕たりすることのないようにと、迫るのです。

犠牲についてヘブライ語の語彙の話となると、指摘されるべき重要な区別があります。これらの物語は両方共に、その使われている術語は“オーラー”「焼き尽くす献げ物」であり、全てがすっかり焼き尽くされ、何らの人間的利益ももたらされないことを意味します。しかし一般に「犠牲」と訳されるヘブライ語の単語は、語根“カーローヴ”-近くにある-から〔派生の名詞〕“コルバン”です。コルバンの目的は神に近づこうとすることです。これらの物語において焼き尽くす献げ物と称されているものは、これを試みてさえいません。その代わり、それらは純粋に利己的です。すなわち、それらのうちの一方はある男のプライドの結果であり、他の一つは国家間の領土的野心の結果です。もしもこれらの物語から引き出されるべき教訓があるとするれば、私たちの世界のいたるところで毎日実行されている、あの無数の焼き尽くす献げ物-〔すなわち〕人間性に何らの益ももたらさず、そして誰をも神に近づけない諸々の暴力行為-に、私たちが異議申し立てをしていくことこそが、聖書の要求に他ならないということなのです。